

けふあらんとはれもひかけしを  
今さらにをしくもあるかあねほろたに

あにこゝろあくすきしつぎひの

こま

つくしちのあろのをやまにたつけふり

おもはぬかたにあになひくらん

喇叭卒

ふくこえはたえくゝあからまこゝろの

いたらぬくまはあらしとる思ふ

ゆめに

ふりつもる雪のあかなるくれたけの

はつかにたゆむれもひたになし

冬曉思遠征之兵士

溪川 學人

大君のまけのまにまに

まつろはぬ醜のねみまを

打ちきため打ちこらさんと

親にまわれ

妻子にはあれ

風さまゝ諸越原に

太刀はきてぬる人々は

君の爲めこの身惜しどは

誰人も思はさらめど

今夜しも月の光の

いとさむくあはれいかにと

思ひつゝ夢も結はず

あかつきの鳥のあぐねに

れどろきて臥戸出つれば

散りのこる櫓のかれ葉に風見えて

庭の草木はことごとくに

眞白にありて霜をおきける

冬の初つら行軍中大村社前にめ

つらしく櫻花の咲けるを見て

草芙蓉

あどさへ々

唐國人をこらさんと

けじめの空の さだめあき

大和男子の 太刀ばきて

時雨せぬまの 小春にて

まごゝるとぎて 一うちにな

神のいかきに 山さくら

しこのえみしを はらはんと

さくもめづふし

命をすてゝ 立ち出つる

數嶋の 大和心を 人とは

時しもけふは み冬たつ

朝日によほふ 山さくらばな

## 批評

### 『國民躰力の増進に就て』を讀みて所見を述べ

松本喜四雄

村川君足下從來足下の龍南會雜誌所載の文を讀む毎に僕未曾て足下が一種非凡の眼光を以て事物を觀察する明あるに感服せずんばあらざるあり『月下に悲觀の人を憐む』『花看すの記』の如き殊に然らざるは無し前號又足下が國民躰力増進に就ての一文を得たり欣喜雀躍取て此を讀む其日本の宿命を説く所僕亦同情を表し其日本國民の躰力躰格の白哲人種に譲らざるを得ざるを奮慨する所僕亦た同感を催す戰國時代の日本人の躰格の偉大かりしを羨し現今の日本人の躰格の年を追ふて軟弱に赴くを悲む所余た亦彼を羨し此を悲む特に國民躰力の減耗——其の原因なる題目の下に國會新聞に載せたる一項を掲げ來りし中、教育の進歩發達を期せん爲め單に學理の研究のみ拘泥し躰育の養成に意を用ゆるの冷淡なるに依るある數句に圈點を附して讀者の注意を引られたるは僕の大に賛同する所なり